
東京

ふい～

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東京

【Nコード】

N5613D

【作者名】

ふゝ

【あらすじ】

大都会東京でかいま見る恋愛模様。今日もこの都会のどこかで、起こっているかもしれない、リアルだからこそ痛々しいラブストーリー。

第1話

初めての体験。

初めてのキス、セックス、告白、そして失恋・・・

一気にすませるなんて、私らしい、と半年前の私は言うのだろうか。今まで、すべて、ものごとは「効率的に」進めてきた気がしていた。大学受験は無駄のない指定校推薦、浪人も留年もなしに4年で卒業、安定している子会社に就職予定。そして恋愛も、効率的に、賢く、終わるはずだった。

彼と出会ったのは、高校の友達に連れられていったクラブ。六本木のクラブは、私がアルコールが好きなせい、単純にわくわくした気持ちで足を踏み入れた。

初めての日本のクラブ。その日は踊るためにジーンズと派手なシャツで行った。

場違いなことはすぐに分かった。

ワンピースを着ている上品そうな女の子たち。爪をきれいに磨き上げ、髪の毛をくるくる巻いている「お嬢様」。

そこに彼はいた。

まわりと同じ、黒いスーツを着て。くだけた感じで私たちに声をかける。

（今考えると、多分先輩社員のために。）

「こっちで一緒に飲まない？」

どうしよう、という顔を作って、友人と顔を見合す。でも答えはすでに決まっていて、yesだ。誰でもいいから、声がかかるのを待っていたのだから。

「もしかして、話しかけられるの待ってたー？」

その男が、何の悪気もなく言うので、私は少し照れた。

たまに、ドキリとする、するどい突っ込み。

誰もが知っているような大手企業の名前。

学歴もすごいに違いない。

今私の左隣では、20代と言われすっかりいい気分になっている、私と一回りも違う男がいる。東大に入りたかったが落ちた、などと言い、10年も前に卒業した大学の話を始めた。

でも自然と目に入っていたのは、目の前にいた彼。どっちかという好み顔だなあ、と酔い混じりにぼんやり考える。

あとは、席を移動したり、飲み物をおかわりしたりして、話していた。

ただ、彼と旅行の話で盛り上がったことだけは、覚えている。

正直、「みつけた」と思った。ピント来たのは、人生で3回目だ。

1人目は大学の部活の先輩、2人目はアルバイト先の1コ上の男の子。そして彼。

適当に飲んで、適当に踊って、終電で帰って、酔った勢いで彼にメールした。

「右隣にいた者です。今日は楽しかったです」なんて、今考えたら、寒気するようなメール。

恋愛経験の全くない私には、予測なんて不可能だった。4つ年上の異性は何を考えているのかなんて、知る由もない。あとはその週末にお誘いのメールが来た。いつものように、学校の図書館で作業をしていた。学校は人目があって、一番はかどるのだ。もう少しきれいな方がいいのに、と思いながらもここに来ると結構充実した時間を送った気になるから好きだ。

正直、ドキドキした。

翌日会ったときは、少し、どもった。

2人で会うから昼間にしたが、結局楽しくて夜まで一緒にいた。彼のデートプランは完璧だった。カフェして、公園行って、映画見て、ご飯食べた。

新宿御苑の名前が彼の口から出た時点で、（これは、やばい）と思った。

私も同じ事を考えていた上に、新宿御苑は私の永年の憧れデートスポットだったのだ。

運命だと思った。

（もしかしたら、私がこの間のパーティで御苑の名前を出したかもしれない、なんてことは、このときは夢にも思わなかった）

彼の欠点を挙げるとすれば、結構血液型占い信じちゃうんだよねーという発言ぐらいなものだった。

彼は私をほめてくれたし、社会人なのに、馬鹿にしないで制するところでもないで、私の話を聞いてくれた。30男の自慢話を2日前に聞いて疲れていた私には、それだけで十分だった。

ワインでお互いがいい気分になったところ、キスとセックスを迫ってきた。「ほっぺにキスしていい？」と聞かれ、うなずくと、すぐに口にもされた。店を出て、もう一度。（ん、なんか入ってきた）一瞬間があいて、（これがディープキスカ）とわかる。

見上げると、月がぼっかり浮かんでいた。私は冷静にそれを見ていた。わざと、冷めた目をぱちりと、彼の肩越しに開けながら。耳元で、「はあ、はあ」と言う彼が滑稽に見えてくる。

彼は何度も「帰っちゃうの？」と尋ねたけど、私も何度も「今日は帰るっ」と言った。

「断るの慣れてるでしょ」と言われたけど笑って答えて、心の中はまだ熱くなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5613d/>

東京

2011年1月26日04時06分発行